

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	木元 英策（大阪府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第74号
学位授与の日付	平成25年9月19日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	中・近世の土地制度と「得分」
論文審査委員	主査 渡邊 忠司（佛教大学教授） 副査 渡邊 秀一（佛教大学教授） 副査 貝 英幸（佛教大学准教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は序章と本編五章および終章から成り、主に土地売券(約 1000 点)を用いて、「得分」をキーワードに戦国期の土地剰余生産物の配分実態を解明することを目的とし、「土地制度の根幹ともいえる在地社会の収取システムを時代ごとに解明し、それが中世から近世に移行するにつれ、どのように変容していくのかについて」(p1)検証している。

そのために、研究史の整理から戦国期の史料に頻出する「得分」「徳分」「内徳分」「加地子」が「農民的剰余」として地主(土豪・地侍)に集積されることを確認して、これを「地主の得分」と規定し、地主が土地の生産物を中間搾取する階層と見て、戦国期から近世初期の在地における具体的な存在形態と収取関係を、主に和泉国熊取地域の中氏を対象に分析し、その実態を確認する。

論文の構成を掲げておく。

#### 序章

##### 第一節 論文の目的と研究史

##### 第二節 目的達成のための課題

#### 第一章 中世における「得分」の存在形態と成立過程

##### 問題の所在

##### 第一節 「平安中期～戦国期」の得分

##### 第二節 「戦国期」得分の存在形態

##### 第三節 「戦国期」得分の成立過程

##### 小括

#### 第二章 戦国期「得分」をめぐる「地主」と「戦国権力」

##### 問題の所在

##### 第一節 買地安堵と「若狭武田氏」領国

第二節	「今川氏真」の買地安堵と検地
第三節	「織田信長」の買地安堵と検地
小括	
第三章	戦国期における「地主」と「地主の被官」の主従関係
問題の所在	
第一節	「地主」の存在形態
第二節	「地主の被官」の存在形態
第三節	被官と知行地の一体観念
小括	
第四章	中近世移行期「尾張」における「織田検地」と「太閤検地」
問題の所在	
第一節	両検地の歴史的経過と通説的意義
第二節	両検地と在地社会
小括	
第五章	近世売券と太閤検地「作あい否定」問題
問題の所在	
第一節	「作あい」「加地子」と近世売券
第二節	「近世の加地子」の成立
第三節	近世における「地主と被官」関係
小括	
終章	
第一節	戦国期「得分」問題の総括と課題
第二節	太閤検地と「近世の加地子」問題
第三節	「中世の遺制」と近世社会—課題と展望—

本論文の内容を要約しておく。

序章では、中・近世移行期研究の諸課題が安良城盛昭氏の太閤検地研究に始まること、および兵農分離と作あい否定政策が地主層の作あい収取を否定し小農民経営の確立を促進したこと、これに従ったその後の研究が中世の地主層の研究に向かい、得分の問題についてはあまり言及されていないことなどの問題点を指摘し、本論文での研究課題が「地主の得分」の存在形態と在地での「収取システム」の解明にあることを確かめ、五章にわたって分析を行っている。

第一章では、「地主の得分」が成立した時期と研究史の論争で取り上げられる史料上の得分が同じかどうかについては行われていないとして、この確認作業を行い、それを前提に狭義の「得分」を売券や寄進状に斗代が明示され、剰余分の一部として定量化されたものと定義する。それによると、平安期の治田(開発田・永世私有田)の領主得分から名主層の形成に伴って名主得分の成立があり、これが戦国期に名主層の得分権＝加地子名主職として成立し、それが「地主の得分」として、定量化された得分の売買という形態で租税体系の枠外に存在する得分と、定量化されていない得分収取権だけの租税体系の枠内に存在する得分という二つの形態があったこと、しかも得分収取権という得分の収取権利はこれまで検

討されてこなかったことを指摘する。これらを前提に、戦国期における売券・寄進状によって公方年貢・諸公事・得分の存在形態を検証している。

第二章では、地主の得分のうち得分収取権としての得分に対して、戦国権力(戦国大名・国人領主)の「地主の得分」への対応を買地安堵を対象に検討する。特に若狭武田氏と織田信長・今川氏の事例を取り上げ、買地安堵の要求主体が地主であったこと、地主側は在地での競望状況から「集積した得分」の保証を戦国大名に求め、戦国大名側は買地安堵の土地を給地化することで地主層の家臣化と軍役増を実現し、地主得分の租税体系の枠内への組み込みを行ったこと、つまり地主得分の掌握であったが、地主の収取権を容認したままでの掌握であったことを確認している。

第三章では、和泉地域における地主として行松氏と中氏を取り上げ、国人領主・守護被官や地主・地侍・土豪という存在形態と、その地主層と若党・定使・中間という「地主の被官」との間の主従関係の実態を検証し、地主の被官の存在形態を検討する。その場合、被官の作職が地主の被官としての扶持の対象であったこと、また村落構成員としては村落運営に関わる上層部で、地主とも並列(ヨコ)関係にあったこと、さらには被官は一般的な下人とは異なる存在であったが、被官が土地と一体の「田地ニ付百姓」という存在で質入の対象であり、知行地と被官が一括して安堵されていたことなどを検証している。

第四章では、織田検地と太閤検地を比較して、中世・戦国期の在地収取システムの変容を天正期の信雄の検地と秀次の検地を取り上げて検討し、天正期という移行期においても、また秀次の検地以後も「地主側の得分集積」は否定されず残存し、継続していたことを確認している。

第五章では、太閤検地後に残存する地主の得分を検証し、これの否定が太閤検地の作あい否定であるとする見方に反論する。作あい(作相)とは「農民側が取得する剰余部分であっても、加地子とは別のものであった」こと、作あい否定の規定には「在地の再生産を確保する狙い」があったという解釈を基に、近世中期ごろまでの中家に残る売券を検証し、加地子記載のない売券と斗代・年貢斗代が表記される売券があり、後者を分析して、本高(検地高)と今高の差額が売買される加地子で地主の得分であること、それが検地以後の生産高の増加分(増高)であること、それゆえに戦国期の加地子とは異なった成立形態をとっていること、元和期には加地子が消滅し、慶安期に「無加地子」として復活、正保年間に加地子の記載が消滅し、それが近世には定米および小作料として表記されるようになることなどを指摘している。

終章では、五章にわたる分析を承けて要約を行い、今後の研究課題を設定している。特に太閤検地が中間搾取の排除を可能にするものではなかったという解釈に従って、「近世の加地子」が成立する背景を村落構造との関連で解明する必要があることを指摘し、「論考の精度を高めるには、近世の村落構造と旧地主層の収取システムがどう関連するのかをより高度なレベルで解明」することを課題としてあげている。

## 〔2〕 審査結果の要旨

以上、本論文は中世・戦国期および中近世移行期における得分について、和泉国熊取地域と北近江を対象に、主に売券の分析によってそのあり方を確認した研究である。

まず本論文の全体的な評価をあげておく。

第一に、本研究の目的が、中近世移行期において中世社会に広く見られる「得分」がどのように変化していくのかを検証して、移行期社会の解明に取り組もうとする点である。得分は、「得分」「徳分」「内徳分」「加地子」などさまざまな用語で史料に出てくるが、本論文はその得分を検討対象にして中・近世後期の社会の変化を考察しようとする。

安良城盛昭氏の太閤検地研究以後、中世史研究と近世史研究との断絶が一般的に言われてきた。最近、中・近世移行期についてはあらたな研究視角での研究が展開してきているが、本論文も中・近世の研究を結びつけようとする意欲を持った研究の一つとして位置づけることができる。とりわけ、中世から近世にかけての経済的事象である得分を検討対象にした点は特筆できる。

第二に、戦国期のさまざまな得分を類型化して、それを基に得分の存在形態を確認したことにある。得分の類型化はこれまで十分に行われていたとはいえないが、本論文は和泉と北近江の一〇〇〇点に上る売券を用いてこれを行い、その類型化にはやや検討の余地があるにしても、その分類を基に戦国期から近世初期の在地における存在形態と収取関係について詳細に分析した点は研究史の上でも十分な意義を持つ。

第三に、また多数の売券を用いて、戦国期の得分について、在地の地主層が取得する得分を「地主の得分」として規定し、その存在形態を売券によって確認し、さらには得分が太閤検地後にも在地(在方)に残存したことを確認している点である。太閤検地での作あい否定は、いわゆる在地の土豪・地侍などの中間搾取を排除した政策であったとされていたが、近年の新たな理解では、あくまでも地主得分収取権の否定で、百姓に剰余分を残すことを確認した政策であったという解釈を、売券を用いて追認していることである。

本論文は中・近世移行期の社会変化を売券を検討対象にして解明を目指した意欲的な研究であるが、問題点・疑問点や今後の研究にむけての課題もある。

第一に、表題には「中・近世の土地制度と『得分』」とあるが、本論では土地制度についてはほとんど触れられていない。中世・近世の社会では、基礎に土地の領有・所有関係があり、それに対応した収取関係、租税体系がある。本論文が得分を検討対象にした目的は在地での収取システムの解明にあったから、当然のことながらそれに対応する在地での土地所有関係や租税体系との関連が触れられるべきであろう。特に、分析対象とした和泉国熊取地域での地主中氏を包括する国人領主や在地領主・村落領主規模の領主的土地領有関係や租税体系、また在地での地主・小作関係を踏まえた、村落構造など社会構造との関連による得分の検証がされるべきであろう。

第二に、得分は社会の基礎的な租税に付加され、租税とは異なって、地主経営の一定部分を構成しており、本論文で取り上げている荒れ地や拔地、分割売買などやまたそこからの得分は地主の経営に関わることであるから、地主の村落内での存在形態、身分階層との関わり、惣村および村・集落の内部構造と地主の関係などを考慮して検討すべきであったが、この点が不十分であった。

第三に、本論文は研究史を整理したうえで、その研究史上の位置づけを、中世在地社会そのものの研究が勝俣鎮夫氏らの年貢村請制、村落が社会に果たす積極的な役割として藤木久史氏らが推し進めた「『自力の村』の姿を提示する論点」に続くものとしているが、論

文の構成上からは「自力の村」などの論点に基づく考察は不可能であり、研究視角と論の展開に大きな乖離がある。もしも展開するとするならば、第三章で展開されるべきで、分析可能な素材が提示されているのに踏み込まれていない。再度検証して展開すべきであろう。

第四に、「地主の得分」という概念を提示して分析・考察を進めているが、その根拠となった寛元元年(1162)五月の豊後国の史料の解釈についてである。史料での「領主の得分」とは開発領主で、「屋敷堀之内」の地子免許を受けているが、これは被官層であるから免許を受けたと理解すべきではないか、疑問が残る。

このほか、「農民的剰余」の理解や、売券の分類の仕方、戦国期の在地社会のありようなどいくつかの疑問点・問題点と検討課題が出された。

以上、本論文はこれまで本格的な研究対象としてあまり取り上げられてこなかった土地売券約一〇〇〇点を丁寧に整理・分析して、中近世移行期の在地社会の収取システムを明らかにしようとする意欲的な論文である。いくつかの問題点はあるが、今後の研究の展開に必要な諸課題であり、克服される問題点・課題と考える。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判定する。